

## 幼き日の思い出

近藤芦羽（北海道・苫小牧市立啓明中学校）

「うちにくるのは、支払いか税金の請求書のハガキだけだね。」と僕が小さい頃郵便受けに新聞と郵便物を取りに行くお手伝いをしていた時、母へ渡すと言うお決まりの言葉でした。税金なんてなければいいのにね、と何もわからない僕が言った時、間髪入れずに母は「うちは、お父さんが教師だから、税金でありがたく生活させてもらっているの。税金がないとご飯も食べられなくなるんだよ。」と言いました。「僕も大人になったら税金を払うようになるんだね。」と言うと母は突然何を思ったか近所の駄菓子屋へ僕を連れて行き、カゴに好きな物を三百円分いれてみてと言いました。ゼリーにスナック菓子、ひものついたあめと……。あつというまに三百円になりました。ところが、レジで三百円のはずが三百二十四円となりました。数え間違えたのかと小さな手でもう一度、確認しだすと母が、子どもだってお買い物をする時、税金を払っているんだよ。それが消費税で、当時は八%払うことを知りました。僕も税金を払ったと思うとなんだか少し大人になった気がしました。すると、他にはどんな税金があるのかが気になりはじめ、父や母に質問責めをした記憶があります。そんな僕に両親は、実物を前に説明をしてくれるようになりました。公園や図書館、市役所に体育館、消防車や救急車、パトカーも見に行きました。僕は生活していくうえで必要なものは、もしかしたらほとんどが税金が関係しているのではないかと予想しました。ゴミステーションに出したゴミを収集車が回収してくれるのも……。どう説明してくれるかを楽しみにしていると市内の大きなクリーンセンターへ連れていってくれ、ゴミを燃やす所を見ながらよく気がついたねとほめてもらいました。その夜、体の弱かった僕は、喘息発作がでて救急病院へ行きました。せきが止まらず、苦しい中、もしかしてこの病院も税金なのだろうか……。と気になりつつもいつのまにか眠ってしまっていた。母は税金を払うのは大変だというけれどそれ以上に沢山の恩恵を受けていることを知り、税金は僕達が生活していくうえで必要不可欠なものだと子どもの頃教しえてくれた事に感謝しています。僕は小さい頃の体験から税に興味を持つようになり、中一になった今でもふと、これは税金に関係しているのだろうかかと疑問に思うと調べる事が習慣になっている。僕の将来の夢は父と同じく教師になることです。国民が、一生懸命働き、支払われた税金がお給料になるんだと思うと、より仕事への責任と、お金の大切さ、ありがたみを感じます。こうして、何不自由なく生活できているのも、税金のおかげです。いつか僕が結婚し子どもができれば、あの時の両親みたいに税金について楽しく教えたいと思っています。その日まで、僕ももっと税金について学び理解を深めていこうと考えています。